

沖縄 空からの金環日食(1987. 9. 23)

小池田 洋子

午前5時、目がさめ外が静かなので、ホテルのベランダに出てみました。

思わずアッと声をあげてしまいました。正面に高くオリオンが傾き、さらに、おおいぬのシリウスから南に目を移すとカノープスまで見えるではありませんか。

「晴れた」

昨日までの今にも降り出しそうなどんよりした空が、うそのようです。沖縄の青い空がもどってきたのです。着替えをして海辺の方へ行ってみました。すばるが真上にあり、アンドロメダが逆さに北の海に沈もうとしていました。

カシオペアから捜す北極星は、金沢よりはるかに低いのです。冷たい珊瑚の砂に、素足立ちになり、しばし沖縄の星空を楽しみました。

すこし離れた所で若者が、南の空に向けてカメラを構えていました。「おはよう、いい天気になりましたね」

部屋に帰ると、白め始めた空に、シリウスだけが残っていました。

テレビの天気予報が、まだ、くもり時々雨、雨の確率50パーセントと言っていました。

金環日食観測のため、この沖縄に来た三千人の願いが叶えられたのでしょうか。

昨日、この沖縄にいるアマチュア無線の友人に会った時に、その方の御主人が、たまたまチャーター機の会社に勤められていたので、予報が雨なら雲の上に出てみてはどうかとすすめられました。

せっかく沖縄まで来たのだから、曇って見られないのは残念と8人誘って、昨日のうちにセスナ機を予約してしまっていたのです。

朝になって、キャンセルが3人で、結局5人だけで乗ることになりました。

晴れば、地上での観測も、飛行機に乗った人も両方見られるのだからいいわけで、もし曇って、飛行機に乗った者だけが見られたら、きっと恨みをかったことでしょう。「晴れてよかった」しかし、Nさんのように地上での観測プログラムを綿密に決めていた人は、心の中で申し込まなければよかったと思ったことでしょう。

青く晴れ上がった空に、所々積雲があるが、観測にはまったく支障のない天気になりました。

10時30分、太陽はすでに4割ほど欠けています。セスナ機の所まで行き、スナップ写真など撮って飛び立つ時間を待ちました。その間にも、他のセスナ機がつぎつぎと飛び立って行きます。「今日は、セスナ機が10機金環帯に入るそうですよ」

パイロットは、他のセスナ機が飛び立って行くのを見て闘志を見せています。

「行くぞ。」

5割ほど欠けた太陽を見ながらセスナ機に乗り込みました。飛行時間は、1時間と限られているのです。飛行機は、那覇空港より北に向い、やがて、眼下に万座ビーチホテルが見える位置で、旋回しはじめました。この機の上方にも下方にも、セスナ機が赤とんぼが飛んでいるように見えます。

「テストにはいります。」

パイロットの声で機は右翼を上げました。窓の正面に、すでに三日月型になった太陽が飛び込んできました。あわてて、2、3枚シャッターを切る。

右翼を上げた機は、当然、左に旋回するのです。太陽は窓から逃げ、地上の景色が全面に斜めに入ってくるのです。

「もう一度、行きます。」

同じことがくりかえされました。

太陽は、細い細い黄金の弓になっています。あっ！ 細い金の弓の先が両方からスーと伸びて美しい金環になったのです。

それは、ほんの一瞬のできごとでした。

「もう一度行きます」、 「もう一度行きます」

何回繰り返されたことでしょう。私のカメラのフィルムがなくなってしまいました。気が付くと、私の体は、興奮と緊張と恐怖でガタガタ振るえていました。

そして、思わず「もういいです」と言ってしまいました。

後の席の人たちは、皆、蒼白な顔をしていました。うつ向いている人さえありました。

しかし、パイロットは、出来るだけ金環の太陽を見せようと、旋回を繰り返してくれました。まるでジェットコースターのように。

金環になった太陽は、私にとって、「あっ金環になった」と言うだけで、ふっとため息がもれました。そこには、コロナもプロミネンスもダイヤモンドリングもありませんでした。皆既日食を見たことのある者にとっては、あくまでも部分食でしかなかったのです。

機上から、沖縄の景色や、エメラルドグリーン珊瑚礁が広がっているのがよく見えました。

沖縄では、日食は、太陽と月の結婚で、その結婚によって多くの歌や踊りが生まれたのだそうです。

大変な金環日食観測でしたが、この目で、太陽と月との一つの出会いをしっかりと見とどけてきました。